

死海文書の謎

マイケル・ベイジェント／リチャード・リー 共著
高尾利数 訳

第16章 パウロ＝ローマのスパイあるいは密告者？

こうした壮大なデザインを心に留めながら、『使徒言行録』の終わり近くで起こる諸事件に関する混乱した、そしてスケッチ風の描写を再度眺めてみるのは、価値のあることだと思う。記憶されているであろうが、パウロは、外国での長い福音伝道の後に、ヤコブや怒れる指導部によって再度エルサレムに召喚される。彼の身近の支持者たちは、紛争を予感して、彼の旅程のそれぞれの場面で繰り返し、行かないように勧告する。だが、パウロは、対決を恐れるような人物ではなく、彼らの訴えに耳を貸さない。ヤコブや教団の指導者たちと会ったとき、彼はまた、律法の遵守において弛緩しているとのかどで酷評される。『使徒言行録』は、こういう告発に対するパウロの応答を記録していないが、この後に続く物語からすると、彼は自分に対する非難を否定し、偽証しているように思われる。そしてそれは、彼自身の手紙が正当化されたものであることを漏らしている。言い換えれば、彼は自分の攻撃の重大性を認識しているのである。そして彼の誠実さがどれほど確固たるものであれ、またイエスについての「彼の」把え方(ヴァージョン)がどれほど熱狂的なものであれ、今度は何らかの妥協が必要であることを認めるのである。そういうわけで、七日の間身を潔めて、彼に対する告発の不正を証明するように要求されたとき、彼は直ちにそうすることに同意するのだ。ヤコブは本当の状況に気が付いていたかもしれないし、パウロはうまく「仕組まれていた」のかもしれない、とアイゼンマンは暗示する。彼が潔めの儀式を拒否していたら、彼は、公然と律法に違反する者と宣言されていたかもしれない。儀式に同意することによって、彼は、以前にもまして、『ハバクク書注解』のいう「偽り者」になったのである。彼は、どのようなコースの行動を選んだにせよ、自分を断罪したことになるであろう——それはまさしくヤコブが意図していたことかもしれない。

そして無罪を証明しようとする彼の自己浄化の努力にもかかわらず、いずれにせよパウロは、「律法への熱情」を持つ者たちの間に敵意を喚起し続ける——彼らは数日後に神殿で彼を襲撃するのである。彼らは宣言する。「この男は、至るところで、あらゆる人に、……律法を無視するように説教している」(『使徒言行録』二一：二八)と。続いて起こった暴動は、けっして小さな騒動というようなものではなかった。

それで、都(みやこ)全体は大騒ぎになり、民衆は駆け寄って来て、パウロを捕え、境内から引き摺り出した。そして、門はどれもすぐに閉ざされた。エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が届かなかったならば、彼らはパウロを殺していたであろう(『使徒言行録』二一：三〇—三一)。

歩兵隊が呼び出される——それも六百名を下らない数——そしてパウロは、間一髪のところまで救出される。おそらくもっと大規模の市民の暴動を防ぐためであった。他のどんな理由のために歩兵部隊が出動するであろうか。自分の仲間の怒りを呼び起こした一人の異端的ユダヤ人の命を救うためだけ、などということがあるだろうか。この暴動の規模そのものが、いわゆる「初代教会」が当時のエルサレムで——ユダヤ人の間で——行使することのできた人気、影響、力がどのようなものであったかを証明している！ われわれが取り扱っているのは明らかに、ユダヤ教自体の内部の運動——しかもその町の市民の多くの忠誠を勝ち取ることができたような運動——なのである。

激昂した群衆からパウロを救出した後、なぜかローマ軍は彼を逮捕する。そして彼は、牢屋へ送られる前に、自分の無実を証明するための演説をすることを許してくれと頼む。説明できないことだが、なぜかローマ軍は彼の要望を認める。もっとも、彼の演説は暴徒をますます激昂させるのに役立っただけであったが。それからパウロは、拷問と尋問のために連れ去られる。以前にも問うたことだが、何についての尋問であろうか。正統性とか儀式の遵守とかという微妙な点に関して仲間の信者たちを怒らせた男を、なぜ拷問にかけ尋問するのであるだろうか。ローマ軍があればほどの関心を示したことに対する唯一の説明は、パウロが政治的および(あるいは)軍事的性格の事情に通じているのではないかという疑惑をかけられたことである。

ローマ軍に対決していた唯一の重大な政治的および(あるいは)軍事的敵手は、ナショナリスティックな運動の信奉者たち——通俗的伝統にいう「ゼロテ党」——だけであった。そして「初代教会」の伝道者であったパウロは、それらの「律法への情熱を持つ」者たちから脅迫されていた——彼らは、三十人から四十人にもおよぶ数の者たちで、彼を殺そうと企てていて、そうするまでは飲み食いをしないと誓っていたのである。パウロは、これまでまったく言及されてこなかった甥によって、この窮状から救い出され、護衛付きで、エルサレムからカエサリアへと送られるが、そこでローマ市民としての権利を引き合いに出して、皇帝に個人的に訴えると言い出す。彼は、カエサリアにいる間に、ローマの総督フェリクスと、打ち解けた親しげな様子で付き合う。アイゼンマンは、パウロが、総督の義兄弟のヘロデ・アグリッパ二世とも、そしてその王の姉妹とも親しくしていたことを強調する。彼女はのちにティトウスの妾になるのであるが、ティトウスは、のちにエルサレムを破壊し、遂には皇帝になるローマ軍司令官であった。

パウロの伝記の背景に漂っている疑わしい要素はこれだけではない。そもそもの初めから、明白に彼が富んでいたこと、彼がローマ市民権を持っていたこと、現存する支配体制と彼が容易に親しくなれたこと——こういうことが、彼の仲間や、「初代教会」の他のメンバーたちとは違っていたのである。明らかに彼は、支配的なエリートたちと強力な関係を持っていた。彼のように若い男が、それ以外の理由で、どうして大祭司の手先になれたであろうか。さらに彼は、『ローマの信徒への手紙』(一六：一一)のなかで、驚いたことに「ヘロディアン」という彼の同胞に言及している——それは明らかに当時統治していた王朝と関係のある名前であり、仲間の伝道者な

どではまずありえない。『使徒言行録』一三：一は、アンテオキアのパウロの同僚で「領主ヘロデと一緒に育ったマナエン」に言及している。ここにもまた、彼が上流階級と貴族的親密さを保っていたことの証拠がある。

こうした暗示がどれほど衝撃的なものであろうとも、パウロが何らかの種類のローマの「諜報員(エイジェント)」であったということは、少なくとも可能であったように思われる。アイゼンマンは、巻物自体によってこの結論に導かれたのであり、それから、それを支える言及を新約聖書のなかに見出したのである。そして実際、クムランで発見された資料を、『使徒言行録』のなかの資料と、そしてパウロの手紙のなかの不明瞭な言及とを、結合させ重ね合わせてみると、そのような結論が明瞭な可能性となるのである。だが、おそらくそれに劣らず驚くべきあるもう一つの可能性もある。エルサレムにおける最後の混乱した、謎に満ちた諸事件、間一髪のローマ軍の介入、エルサレムからの大規模な護衛付きのパウロの脱出、カエサリアでの彼の贅沢な滞在、歴史の舞台からの神秘に満ちた、そして完全な消滅——これらは、われわれ自身の時代に奇妙な呼応を見出すのである。われわれは、合衆国における「証言保護綱領」(Witness Protection Program)の受益者たちを思い出す。われわれはまた、北アイルランドのいわゆる「スーパーグラス現象」を思い出す。どちらの場合にも、組織化された犯罪あるいは正規軍に準じるテロリズムのために捧げられた不法の組織のメンバーが、当局によって「転向(ターン)」させられる。彼は、免除、保護、再配置、金と交換に、証拠を提供し証言する。その者は、パウロのように、自分の仲間の激怒を招き復讐を受ける。彼は、パウロのように、明らかに不釣り合いな軍事的保護および(あるいは)警察の保護の下に置かれる。彼は、パウロのように、護衛つきで連れ出される。当局に協力したので、彼は「新しいアイデンティティ」[新しい身分保証]を与えられ、自分の家族ともども理論的にみて彼に復讐しようとする仲間の手が届かないどこかに落ち着かせて貰う。世間全体との関わりということになれば、彼はパウロのように、蒸発してしまう。

とすれば、パウロは歴史に見られる「秘密諜報員」の仲間属しているのであろうか。歴史に見られる密告者や「スーパーグラス」の仲間なのであろうか。これらは、ロバート・アイゼンマンの研究によって生じてきた幾つかの疑問である。いずれにせよ、パウロの登場は、一連の運動を生じさせ、それらは逆転できないものとなった。当時のユダヤ教の枠内にあったローカルな運動として始まり、聖地を越えて影響を及ぼすようなものではなかったものが、当時誰も予見することなどできなかったような規模と比重を持つものへと変容していった。「初代教会」やクムラン共同体に託された運動は、事実上横取り(ハイジャック)され、その創始者たちをもはやかかえ込むことができなような何物かに変容させられてしまった。そして、最初は異端的であった思想の繻(もつ)れが生じ、それが続く二世紀の経過のなかで、まったく新しい宗教へと進化してしまうことになった。ユダヤ教の枠内で異端であったものが、今やキリスト教という正統になったのである。これほどの遠大な結果を生み出した歴史上の偶発事件は、他にはほとんどありえない。

(以上。第 16 章『パウロ＝ローマのスパイあるいは密告者?』 **全文抜粋**)